京都大学大学院思修館5年一貫のプログラムを振り返って

目指せ！博士号を持ったグローバル人材

2012年からスタートしたリーディング大学院（博士課程教育リーディングプログラム）。この春、初年度に始まった20のプログラムから一期生が巣立った。リーディング大学院の中で唯一、当初から助成事業終了後も独立した教育組織としての運営を目指したのが京都大学の「京都大学大学院思修館」（博士課程教育リーディングプログラム・オールラウンド型）。一期生は、変則的だが出身学部が直結する大学院の修了生となる。農学研究科に在籍しながら、世界の食糧問題の解決を志して、今春、外務省職員となった白石晃將さんに、グローバル人材について、そのための《修業》について語っていただきました。

文理融合型大学院で学ぶということ

思修館は文理融合型の大学院ですが、進級のために様々なプログラムをこなす必要があり、特に実験室で研究を行う理系の学生にとっては時間管理がとても重要でした。微生物学を専攻し、酵母の自然界での生き様を解明する研究をテーマとしていたため、思修館での講義の合間にも、定期的に実験室で作業をしなければならなかったのはとても大変でした。同期の中には、動物を実験対象にしていた仲間もおり、餌やり等で毎日欠かさず決まった時間に研究室に行く必要があったため、もっと苦労していたと思います。

5年間を振り返ると、精神的・体力的に厳しい時期もありました。しかし、学部一回生から指導していただいていた先生に、思修館プログラムを履修したことで大きく成長できたのではないかと言ってもらったことはとても嬉しかったです。

海外武者修行でFAOへ

自分を一番大きく成長させてくれたのは、4年次の「海外武者修行」。念願だったイタリアの国際連合食糧農業機関（FAO）で一年間、長期のインターンシップを行い、国際的に活躍する基盤を作ることができました。

FAOは世界の食糧生産と分配の改善及び人々の生活水準の向上を通して飢餓撲滅の達成を目的とする国際機関であり、科学的な知見に基づく情報・データを豊富に蓄積しています。私は高校時代から生き物に興味があり、学部では農学部で広く生命現象を学び、大学院進学後は酵母を材料に、菌と植物の相利共生や、そこから植物に良い影響を与えてくれるような菌の機能解析、さらにはそれを使った食料増産の可能性へと研究を進めていきました。ただ一方で、研究だけではなく、その成果を社会や世界のために役立てたいという思いも強く、自分の学んだ科学（微生物学、遺伝子工学）が、実際に世界ではどう使われるかをこの目で見て、学ぶことも「海外武者修行」の大きな目的の一つでした。FAOでは、遺伝子組み換え食品の安全性評価に関わるデータベース管理業務に携わり、科学的な知見に基づく情報・データの蓄積に貢献できたと思います。

全寮制で熟議などを

思修館は5年一貫制で、従来の日本の大学院制度の弱点を補いながら、なおかつグローバル社会に対応できる文理融合のリーダー育成を目指します。2年次から3年次へ、3年次から4年次への進級時には、厳しい関門（QE：Qualifying Examination）が設けられている点や、海外武者修行だけでなく、国内外でのボランティア研修なども従来の大学院にはない制度です。

全寮制も大きな特徴で、最新設備の寮は、「合宿型研修施設」と呼ばれるように教育機能も担っていて、「熟議」（産学連携特別セミナー：日本の官界、財界のトップランナーを招いてセミナー形式で行われる）のためのセミナールームや、寮生の必読書とされるグレートブックスを備え、茶室も兼ねた畳の部屋などもあります。居室は大学院生ということもあって完全個室ですが、外出から戻ると、共通スペースなどには誰かしらいて、それが精神的な支えになるとともに、そのまま議論が始まることなどもあって、自分を成長させる絶好の場ともなりました。

学生一人ひとりに対応したテーラーメード教育も特徴の一つです。研究指導教員、教育指導教員に加えてメンターが付くのは非常に良い制度で、それら先生方から経験に基づいたアドバイスをいただくことができプログラムをこなす上で大変役に立ちました。

英語と教養教育

英語力の強化については、TOEFLの対策授業もありますが、思修館で受ける授業の4～5割は英語による授業でしたから、英語に慣れるのも早かったと思います。個人的には、民間の英語教育機関のネット授業を1年次から受講し、スピーキング・リスニング能力の向上に努めました。

グローバル人材に不可欠な教養の獲得については、「八思（共通基礎科目）」と呼ばれるカリキュラムの履修が重要であったと思います。①人文・哲学，②経済・経営，③法律・政治，④語学，⑤理工，⑥医薬生命，⑦情報・環境に加え、⑧芸術の8分野で、自分の専門分野を除く7分野から各2科目ずつ履修します。馴染みのない分野を学ぶことはかなり大変でしたが、様々な分野に知識の引き出しを作ることができた点で大変有意義でした。日本について学ぶことも重視されており、法学の授業で国際平和に関する憲法第9条について学んだことが印象に残っています。また、日本文化を学ぶために芸術の科目として、茶道や華道、さらには書道もありました。FAOでのインターンシップ中に開催された日本茶を提供するイベントでは学んだことを活かして貢献でき、いい思い出となりました。イタリアには日本の芸術に加え、アニメ、マンガなどのサブカルチャーに興味を持つ外国人も多く、有名なアニメやマンガくらいは勉強しておけばよかったなと少し後悔しています（笑）。

サービスラーニングとPBRも

1年次での2週間に亘る老人福祉施設での国内サービスラーニングも忘れられません。また2年次には、海外サービスラーニングとして、JICAの海外短期派遣でバングラデシュのコミラという都市でホームステイをしながら農村開発のボランティア活動に携わりました。

5年次のPBR（プロジェクト・ベース・リサーチ）では、4年次での武者修行経験を活かすべく、東京でバイオテクノロジーに関するシンポジウムを主催しました。国際機関を含めた各セクターからのパネリストの招聘、会場手配、さらに資金調達に至るまでその多くを一人でこなしました。最終的には、バイテク情報普及会※の資金協力も得て、150名の参加者を募ることができ、思修館での集大成となりました。

日本と世界の未来のために

思修館を一言でいうと、「博士号を持った即戦力グローバル人材の育成の場」でしょうか。私自身にとってグローバル人材とは、自らの専門性をもって、世界のどこへ行っても《ところかまわず》働ける人です。

就職に当たっては、国際社会における日本の安全と繁栄の確保のために情熱と使命感を持って働きたい、という思いから外務省に任期付職員として入省しました。現在、思修館での学びを最大限に活かし、エネルギー・食料・鉱物などの資源を日本に安定的に供給するための外交を行う部署で日々の業務に取組んでいます。今後は、外務省を含めた国内省庁、FAOなどの国際機関に活躍の場を求め、日本と世界のよりよい未来をつくるため貢献したいと思います。

※英名：Council for Biotechnology Information Japan（CBI Japan）植物科学やバイテク作物の開発企業で構成する国際組織「クロップライフ・インターナショナル（本部ブリュッセル）」傘下の任意団体。2001年設立。持続可能な農業の実現や食料の安定供給への貢献をビジョンに、サイエンスベースで透明性ある許認可システムの構築を支援するための活動や、幅広いステークホルダーにバイオテクノロジーの重要性を理解してもらうための広報活動を行う。

外務省経済局
経済安全保障課
白石　晃將さん

Profile
京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻（博士）。博士課程教育リーディングプログラム「京都大学大学院思修館」（修了）。京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻（修士）。京都大学農学部応用生命科学科（学士）。岐阜県立多治見北高等学校出身。